

## 東京オリンピックで感じた自他共栄の精神

木越清信<sup>1)</sup>

### Spirit of mutual prosperity for self and others was felt in Tokyo Olympics

Kiyonobu KIGOSHI<sup>1)</sup>

#### 1. 東京オリンピックと私

日本時間の2013年9月8日午前5時ごろ、2020年に実施される夏季オリンピック競技大会の開催地が東京に決定した。この日は9月6日から三日間の予定で開催されていた日本学生陸上競技対校選手権大会（通称、日本インカレ）の最終日であった。なお、日本インカレの会場は、1964年の東京オリンピックで開会式の会場となった国立競技場であった。霞ヶ丘まで日帰り出張していた私は、つくばの自宅で決定の瞬間を迎えた。あの瞬間の感激は、今でも鮮明に覚えている。あの瞬間から、若い競技者たちは、東京オリンピックに選手として参加することを夢見たであろう。また、競技者以外の立場にある人間も、コーチとしてオリンピックに関わるなど、何かしらの形でオリンピックに関わりたいと思いを馳せたのではないだろうか。私も例外ではなく、兎にも角にも英会話の勉強を始めようと心に誓った。しかし、東京オリンピックでは、連盟の強化担当者としてオリンピックに携わることも、コーチとして自身がコーチングを担当する選手を輩出することもで

きなかった。特に、後者については、大学の陸上競技部でコーチングを担当する者として、忸怩たる思いであった。

一方で、本学陸上競技部のOBからは、戸邊直人選手（日本航空）、および衛藤昂選手（AGF）が男子走高跳に、山下潤選手（全日空）が男子200mに出場した。特に、戸邊選手は、日本人として49年ぶりに予選を突破して決勝に進出した。惜しくも決勝において入賞を果たすことはできなかったが、日本の走高跳にとって価値ある一步を踏み出した。予選では、戸邊選手を含めて16名の選手が2m25cmをクリアし、決勝進出が自動的に決まる上位12名に入るには、2m28cmを1回目にクリアすることが求められるなかで、しっかりと2m28cmを1回目でクリアした。さすがと言うべきであろう。走高跳と棒高跳は、その跳躍において目標となるパフォーマンスがバーとして設定されており、目標が有形物として目視できる点で陸上競技のなかでも珍しい。このような特徴により、プレッシャーのかかる試技において冷静に競技することは極めて困難である。ましてや、母国開催のオリンピックにおいて、あのバーさえ跳び越え

---

1) 筑波大学体育系

Faculty of Health and Sport Sciences, University of Tsukuba

れば決勝に進出できると認識した状態において、本人が晒されたプレッシャーの大きさ、その中でも冷静に競技することの困難さは、察するに余りある。そのような状況において、2m28cmを一回目でクリアした戸邊選手をみて、この人は強い、と心の底から感嘆した。そもそも、オリンピックに代表選手として出場するためには、高い標準記録や厳しい国内選考会を勝ち抜く必要がある。見事に出場権を得たとしても、4年に一度しかないオリンピックにおける順位争いは正に群雄割拠と言える状態である。さらに、それが競技者として二度と迎えることのない母国開催のオリンピックとなれば、失敗と成功との間で一喜一憂する心の振れ幅はとてつもなく大きいものと容易に推察できる。東京オリンピックが決まった2013年時点で競技者としての活動を一切していなかった私は、競技者として母国開催のオリンピックを迎えることができる世代がうらやましいと感じることがあった。しかし、オリンピックが近づくにつれて、その感情は、可哀そうとすら感じるようになった。果たして自分は、彼らが晒されているような大きなプレッシャーに打ち勝つことができるだろうかと思像すると、母国開催のオリンピックを競技者として迎え、プレッシャーを真っ正面から受け止めて、一生懸命に競技したことだけでも見事であったというべきだろう。ましてや、未知のウイルスに振り回されて、オリンピックの開催が一年延期されたことから、いろいろと考えることのできる時間も、プレッシャーに晒される時間も伸びた。このことを考慮すると、やはりこの期間を一生懸命に競技したことだけでも見事である。

連盟の強化担当者として携わることも、コーチとして自身がコーチングを担当する選手を輩出することもできなかった東京オリンピックであったが、幸いにも、日本国内向けテレビ放映の陸上競技解説として、オリンピックに携わるチャンスを得た。テレビ放映の解説としてオリンピックに携わるのは、ロンドンオリンピッ

ク、リオデジャネイロオリンピックに続いて3回目であったが、今大会は「コロナ禍」という未曾有の事態に直面していたため、これまでに私が経験したオリンピックとは全く異なる大会であった。表面的なことを挙げれば、アクレディテーションカードを有効にした日から5日ごとにPCR検査を受検することを求められたり、スタッフとの会食も一切なく、宿泊ホテルのあった麹町は、業務が終わって帰ってくる頃にはコンビニしか営業しておらず、毎晩一人で寂しくホテルの部屋でコンビニ弁当を食べたりしたことが挙げられる。加えて、国立競技場に入場するセキュリティーチェックの前では連日、オリンピック反対派が活動をしていて、このような姿も、私が体験した過去二回のオリンピックでは見ることがなかった。しかも、その活動のすぐ横で、五輪のモニュメントで記念撮影をしようとたくさんの人ばかりができていた。オリンピックを楽しもうとする人と開催に反対する人とが、すぐ隣にいる光景は異様であったし、オリンピック開催の可否について、日本の世論が真っ二つに割れていることを認識させられる光景であった。

日本をさらには世界を真っ二つに分けた議論の末、新規感染者が1万人以上確認された第5派真っ只中において、オリンピック史上初めての無観客で行われたオリンピック。スポーツ文化の担い手である我々は、このような社会情勢において開催されたオリンピックから何を学ぶべきなのか。この点について、オリンピック期間中に解説業務に携わりながら、そしてオリンピック後にその余韻に浸りながら考えたスポーツの価値、競技者が競技することの価値を、本誌紙面をお借りして考えていきたい。

## 2. 東京オリンピックで感じた苦悩

東京オリンピックの開幕を3か月に控えた4月下旬、東京など4都府県に3回目の緊急事態宣言が発出された。その後、6月中旬に沖縄県を除いて緊急事態宣言は解除されるものの、7

月初旬にはまた東京都に4度目の緊急事態宣言が発出された。この時点で、東京オリンピックの開会式まで2週間であった。このような混乱の中、メディアが実施する世論調査では、60%を超える都民がオリンピックの開催に否定的な印象を持っていることが伝えられ、著名人のなかからもオリンピックを中止すべきであるとのコメントが相次いだ。

そんななか、白血病から復帰し競泳の日本代表に内定していた池江璃花子さんに、SNSを通じて出場を「辞退してほしい」、「(オリンピックの開催に対して)反対の声をあげてほしい」などのコメントが寄せられていることが明らかになり、話題となった。池江さんは、SNSを通じて、競技者が置かれた苦しい胸の内を打ち明けるに至った。そのなかで池江さんが書いているように、「今このコロナ禍でオリンピックの中止を求める声が多いことは仕方なく、当然のこと」であったろう。また、オリンピックの開幕に先立つ7月20日に行われた日本代表選手団の会見において、日本代表選手団の福井団長も「様々な意見があることは承知しておりますが、アスリートが集中できる環境を作っていくことが選手団の仕事」と述べたように、代表選手も、日本選手団役員も、オリンピックにおいて自身が担う役割に迷いが生じていたように感じる。これは、オリンピックを支える側の我々も同じことであった。そもそも感染を恐れるのであれば、自宅にてテレビ観戦をした方が安全である。しかし、迷ったからと言って、オリンピックに携わることをやめるという無責任な選択をすることも容易ではない。感じることは多々あれど、誰かがやらなければいけないという使命感のような感情もあった。

今大会を通じて、感じたことの一つとして、オリンピックというビックイベントがとてつもなく多くの人の支えによって、言い換えると多くの人の仕事によって成立していたことに気づいた点を挙げたい。本学陸上競技部のOBも、尾縣選手団総監督を始め、組織員会メンバー、

陸上競技場での場内アナウンス、スターター、競技者係や各種審判と多方面で活躍していた。また、ボランティアとして本大会を支えた本学学生も多かったものと推察する。さらに、自衛官の姿もたくさん目にした。セキュリティーチェック業務は自衛官が担っていたし、表彰式における国旗の掲揚も自衛官が担っていた。加えて、メディアとして仕事をしている方々も大勢いた。ペン記者と呼ばれる新聞や雑誌の記者から、映像メディアの関係者まで世界各国から集結していた。無観客で開催したことで不要になった業務もあったものと推察されるが、コロナ禍で開催されたことによって追加された業務もあったであろう。多くの人にとってオリンピックを支える動機になったものは、オリンピックが開催するに値する、つまり多くの人に観てもらいたいイベントだからに他ならない。そして、いつしか、無観客で開催されていたことから、会場にいる人間はすべてオリンピックを支える人間であることに気が付いた。そこから、お互いに労をねぎらう言葉をかけるなどして、一体感が醸成されていったように感じる。これらのことも、コロナ禍における特異的な使命感を共有した仲間同士だからこそ感じたことで、コロナ禍において開催された今大会に特異的な感情であったといえる。

### 3. アスリートが競技することの価値

一方、競技者からは、「コロナ禍にあって、世界中で多くの人々が大変な困難に直面しているなかで、我々のお披露目を用意していただいたことを感謝します」という類のコメントが見受けられた。オリンピックは競技者にとって長い準備期間をかけたパフォーマンスのお披露目会であり、このようなコメントは、新型コロナウイルス蔓延防止に関わる様々な制限のなかで、競技者の自己実現の場が失われていたことを考慮すると、まさに素直なコメントである。しかし、このコメントには違和感があった。それは、つまり競技者がオリンピックで競技する

ということは、オリンピックというイベントを多くの人に楽しんでもらうための役割の一つであり、支える側にいた我々は、競技者のお披露目を準備するためだけに仕事をしたわけではない。これは、音楽のコンサートと同じである。コンサートを支える側の人間は、歌手や演奏家のお披露目を準備しているのではなくて、音楽の力、価値を多くの方に伝えて、楽しんでもらうために仕事をしているのである。

アスリートが高いパフォーマンスを志向することの動機は、自己目的の達成である。これによって、オリンピックをお披露目会と理解していたといえる。一方で、別の面としてアスリートは公の人格を有している（新井，2019）。アスリートという言葉は、その語源が古代ギリシアのアスロン *athlon*（賞品）を賭けて競技するもの *athletes* に由来しているとされている（森川，1987）。これらのことを考慮すると、社会に対し公の人格として競技している姿をみせることが、社会におけるアスリートの役割の一つであると言える。その意味において、当然のことながらアスリートが競技することも、オリンピックを観てもらうためになくてはならない役割である。一方で、公の人格という表現が、抽象的であることから、アスリートがそれを認識することが困難なのかもしれない。より身近な表現に変えるとすれば、次のようにならうか。たとえアマチュアとして競技するアスリートであるとしても、応援してくれる人が必ずいるはずである。それは、家族かもしれないし、友人かもしれない。観客のいなかった今大会ではあったが、不思議と会場は盛り上がっていた。それは、観客席にいる人々がチーム関係者だけであったため、応援する対象を明確に持っていた、しかも、当然のことながら、彼らはその競技のことをよく知っている。このような人たちが観ていたことが、会場が盛り上がっていた一つの理由であろう。この構図をイメージすると、アスリートは、応援してくれる家族、友人、チームメイトを楽しませるといふ公の人格

を有しているといえる。そして、アスリート自身が公の人格を有していることを認識することは、応援してくれる人を楽しませるために日々精進することを通じて、自身の競技力にもポジティブな影響をもたらす可能性もある。本大会は、無観客での開催によってパフォーマンスの低下が心配されたが、陸上競技で3つの世界新記録が誕生するなど非常に高いレベルの戦いを見せてくれた。このことは、観客はいなかったものの応援してくれる人（チーム関係者）がスタンドにいたことも理由かもしれない。スポーツ基本計画（スポーツ庁，2017）で述べられているように、家族や友人等が一生懸命応援することでスポーツを「する」人の力になることができる。このように考えると、アスリートにとって、応援してくれる人は不可欠である。一方で、応援する人も、またアスリートを応援し、ハラハラ、ドキドキして心を震わせることで、*well-being* になっている。スポーツ基本計画（スポーツ庁，2017）では、スポーツを「みる」ことで、極限を追究するアスリートの姿に感動し、人生に活力が得られると述べられている。このように、アスリートを応援することは、応援する人の心身の健康にとってポジティブな活動であって、アスリートは、応援の対象となつて、応援する人にハラハラ、ドキドキを提供することで、応援する人を元気にしている可能性もある。

観る側の役割は、応援すること以外にもがあると考えられる。それは、観る側にとって観やすい方向へのルール改正の提案である。これまでも、観る側からの働きかけによってルールが改正された例は多々ある。これにより、競技がより観やすく、応援していてより楽しい方向に発展する可能性がある。今大会は無観客で行われたため、オリンピックを観戦する人のすべてがメディアを通じて観戦した。メディアを通じて観ることが当たり前になったことによって、競技場に足を運ぶことができなかつた人にも臨場感に溢れる観戦体験が可能になったこと

には意味があったといえよう。新型コロナウイルスのパンデミックが収束する兆しが見通せないことを考えると、今後、メディアやライブ配信などを通じて観客を楽しませることができるようルール改正が行われる可能性は十分にある。また、アスリートを応援し、ハラハラ、ドキドキして心を震わせることで well-being になっていることが実感できるようになれば、一緒に応援するメディアなどこれまでにないものが創出される可能性もあろう。

#### 4. まとめ

このように考えると、競技する人、観る人、支える人のどの役割が欠けてもスポーツは成立しない。これに加えて、お互いの存在によって相乗効果が期待できるような存在であることも認識するに至った。これは、まさに、嘉納治五郎の提唱した自他共栄の精神そのものである。国民に理解されないようなオリンピックを開催することの意味を、スポーツ文化の担い手たち全員が考えるような大会であったからこそ、認

識することのできたアスリートが競技することの価値であった。東京オリンピックが終わって、スポーツ庁関連の予算が減少することや、企業のスポーツやアスリートへ投資が減少することも考えられる。新型コロナウイルスのパンデミックの収束を見通すことも難しい。このような難しい時期だからこそ、アスリート、支える（伝える）人、応援する人、つまりスポーツ文化の担い手が自他共栄の精神でまとまり、力を合わせることで、新しいスポーツの価値を創造していきたい。そう強く感じた東京オリンピックであった。

#### 文献リスト

- 新井彬子, アスリートの価値マネジメント, AD STUDIES, Vol.67, 49-53, 2019.
- 森川貞夫, プロフェッショナルスポーツ, 最新スポーツ大事典, 大修館書店, 1121-1122, 1987.
- スポーツ庁, [https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656\\_002.pdf](https://www.mext.go.jp/sports/content/1383656_002.pdf)